序文
――文化横断的コミックス／マンガ研究をめざして

ジャクリーヌ・ベルント

コミックス／マンガ[1]にも影響を及ぼすグローバル化は、文化横断的な研究を求めつつある。このような研究をめざす際、研究者同士はお互いの特殊性を意識することが必要なだけではなく、共通点を確認することも必要である。文化を横断する議論を進めるための一つの契機は、日本で表現論と呼ばれる、コミックスの「言語」に関する形式論である。これは鈴木繁が本書での論文において示している通りである。しかしそれだけでなく、もう一つの契機は、読者層の性別、文化的正当性、規制問題、歴史的認識などを含む、世界中で共有される近代性の諸側面に求めることができる。例えば、アメリカのコミック・ブックとグラフィック・ノベル、フランスのバンド・デシネ、漫画と漫畫（マンファ）、南米のヒストリエタ、オランダのベールドヴェルハーレン、そして同人誌などに共通する特徴の一つとして、「国籍（ナショナル）」から逃れる傾向が挙げられる。つまり、コミックスは、近年に限らず、ナショナルなレベルをトランスカルチャーとして上回ったり、サブカルチャーとして下回ったりしてきたのである。

サブカルチャーの面から述べてみよう。コミックスはその歴史において、読者層が厚いメディアである新聞から、主にサブカルチャー系の共同体に活動の場を移したといえる。「コミックス」という言葉（またはそれに相当する諸用語）

1　以下では日本の特性を強調しない限り、「コミックス」を総称として使う。

ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/
ⓒ 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center

は、現在に至るまで、公的機関、知識人や学術的会議よりは、男性のオタクと思春期の少女、専門店やファン同士の話し合いを連想させる。しかし、コミックスは、サブカルチャー（下位文化）であると同時に、トランスカルチャー（超域文化）への傾向も示している。例えば、日本のマンガは、その歴史において、欧州のカリカチュアやアメリカのコマ漫画に対しても目を向けていなかったら、今日の成功を成し遂げられなかっただろう。また、アメリカの新聞漫画や後年のスーパーヒーロー・コミックスは根本的に移民たちのメディアだったが、1950／60年代にはフランスとベルギーのバンド・デシネに近代化の刺激を与えた。さらに、ドイツのコミックス市場は、輸入された作品に依存しているという点において、異文化間交流の場であることを再検討することもできよう。

しかし、コミックス自体の「国籍」から逃れる動きとは対照的に、研究を含むコミックスの言説は、その対象を国籍化してしまう傾向が顕著である。国ごとの特殊性を主張することは、一方では自国のコミックスの文化的市民権を高める努力、また他方では国際市場でのシェアをめぐる競争との関係において確かに有益である。ただし、近年、事情がもっと複雑になってきている。例えば、韓国の出版社はマンファを欧米で販売するに当たって、どこまで日本マンガのブームに乗るか、あるいは日本マンガと一線を画するかを検討している。また、日本マンガが世界でブームになったのは、エキゾチックでありながら、親しみ易くもあり、特に欧米において異文化の魅力を感じさせると同時に、文化横断的な読みもできるという特質のためである。しかしながら、日本国内では、日本のマンガ・スタイルで描かれてないものは、文化横断的に、つまり「コミックス」として読まれるチャンスが非常に少ない。1970年代以降、日本国内の市場は、日本のマンガ読者がコミックスを読むための文化横断的リテラシーを失わせるくらい独自の発展をしてきたからでもある。本書では小田切博が日米の比較を通して示すように、マンガの評論家および研究家は、この傾向を後押しした。しかし、ナショナライゼーションは日本に限った話ではなく、視点を変えると、この細分化は、世界中のコミックス研究自体を特徴づけるものである。それを論じるパスカル・ルフェーブルは、コミックスそのものを、出版メディアやジャンル、あるいは表現スタイルに固執せず論じている専門書がほとんどないということを指摘している。このことからも、超域文化的なコミックス研究が不可能なのではないかと結論せざるを得ないかもしれない。とはいえ、コミックス研究の専門書の翻訳版は、翻訳されていない作品を具体例としてその論考を展開する場合、受容されにくいことも事実だろう。2009年に和訳が出版されたティエリ・グルンステン著『マンガのシステム』（フランス語初出1999年）はその一例である。日本の読者に馴染みのない作品が論じられてはいるが、理論的思考のお陰で、相互に異なるコミックス文化の橋渡しが可能になる。

グルンステンは、2009年12月に京都国際マンガミュージアムで開催された第1回国際学術会議にキーノート・スピーカーとして招聘された[2]。2006年11月にオープンしたこのミュージアムは、京都市、土地と建物のオーナーである龍池自治連合会、さらに日本において大学のレベルでマンガ家を育てる伝統が最も長い京都精華大学といった三者のパートナーシップによって実現された施設である。そして、京都精華大学の国際マンガ研究センターは、このミュージアムの研究部門であり、上記の会議において、マンガ研究は「国際」的であるべきという信念のもと、海外の作家を紹介したりコミックス関係の情報を収集したりするだけでなく、学術研究を展開する形でも「国際化」を果たそうとした。本書は、主にこの会議の報告に基づいて発表者が加筆等をした論考から構成され、単なる会議報告書を超える論集としてまとめられたものであるが、その出発点である2009年12月の会議についてごく簡単にまとめる必要があるだろう。

3日間に亘って開催された本会議は、いわゆる新世代ワークショップから始まった。博士課程在籍および博士課程修了の若手研究者は、日本語が母語であるか否かにかかわらず、日本語でそれぞれの研究分野の視点からコミックス研究の現状を批判的に論じた。そのときの全6報告者のうちの4

2　http://www.kyotomm.jp/event/study/isc01.php（最終確認 2010年9月10日）

ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/
© 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』
ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/
© 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』

人による発表が本書に含まれている。

新世代ワークショップの後に行われたティエリ・グルンステンの基調講演によって、会議が本格的に始まった。グルンステンは、フランスのコミックス文化における多様性に焦点を当てる一方、将来性のある革新的な表現を生み出すためには「自文化」の遺産を重視すべきであると強調した。また、コミックスだけでなく、その環境をつくっている知的な言説の相違をも考慮する必要性を指摘した。特にフランスと米国との相違に言及したが、日本語が理解できないとほとんど知ることができない日本のマンガ論にもこの問題が当てはまることが明らかになった。

グルンステンに対するコメントは、日本のマンガ研究において、特にロドルフ・テプフェール論によって評価されている、フランス文学者兼メディア研究者の森田直子が行った。この発表をもとにした論考は本書に掲載されているが、本書の序文になり得るほど、いくつかの中心的な問題を提示している。例えば、日本においてさえもマンガの市民権が必ずしも全面的に得られていないということを確認しただけでなく、歴史的な変化を追求しながら、作品論をコンテクスト分析と絡み合わせること、つまり、文学研究に由来する創作法や批評・鑑賞法を、社会科学的アプローチにも結びつける重要性を明らかにしたのである。本論集および会議のタイトルに登場する「コミックス」という英語を自明で普遍的なものとして使用することに疑問を呈している森田は、比較文化、つまりインターカルチャーの研究を進めている。このインターカルチャー志向は、一見、普遍的と思われる文化が「トランスカルチャー」の名において支配的になってしまうという恐れに裏づけられていると思われる。例えば「アート」と「自律」、「作者性」など、元来、近代ヨーロッパが生み出した概念を、無自覚に非歴史的な形で欧米以外の作品や二次創作物に当てはめてしまうことに対する恐れであろう。それと関連する同人誌の研究状況は、ネラ・ノッパの論文に取り上げられている。

近年のグローバル化に対する関心が果たして異文化を理解することにつながるのか、という疑問も森田の論考から窺える。実際、会議では、「異質」な要素を自分自身の枠組みに当てはめてしまう傾向が見えなくはなかったが、むしろそれとは正反対の論考の方が目立った。例えば本書の夏目房之介による論考は、各国で異なる読書・研究の伝統がいかに出会えるかをめぐって相当な交流が行われたことを感じさせるだろう。この交流の延長線上に、一体どのような作品について専門家が「コミックス・リテラシー」を欠いてしまうか、つまり、それぞれの嗜好とブラインド・スポットを分析することで文化横断的な研究を進めることが可能だろうかという意見も会議で挙がっていた。また、日本国内の事情に詳しくない外国人が出席したことによって、日本人同士の間で自らの研究分野について新たな視点から意見交換を行うような場面もあった。しかし、他者の発言を求めず自分の意見のみを発信するような独白的な発言が存在したことも認めざるを得ない。それは普通の学会として例外ではないが、今回の会議においては、異文化交流の努力だけでなく、非権威主義的なコミュニケーション・ツールであるはずのコミックスという対象の精神をも切り崩してしまう危険性を孕んでいた。

さて、近年、マンガを研究資料とする若手研究者が増えつつある。日本におけるこの傾向は特に社会学と文化研究、ジェンダー・スタディーズやメディア論において顕著である。狭義のマンガ研究に限らず多様な視点からのコミックス論を進めるために、2009年12月の会議は三つのセッションおよび一つのワークショップから構成されていた。第1のセッションでは、日米において学術的な注目を集めているコミックスの性別ジャンル、特に女性とマンガに焦点を当てた。司会は、今まで主に英語で少女マンガ研究の成果を発表してきた大城房美が担当し、コミックス作家兼コレクターのトリナ・ロビンスによって最初の発表がなされた。ロビンスは、会議の開催当時ミュージアムで開催されていた彼女の企画による「コミックスを描く女性たち　アメリカの女性コミックアーティストたちの100年」展を背景に、「女の子がコミックスに何を求めるのか」

ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/
© 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』
ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/
© 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』

について自分の経験をもとに報告した。次に、中国製の漫画が国際的な注目を集めつつある現在、見逃されやすい香港漫画、なかでも少女漫画についての紹介を黄少儀（ウェンディ・ウォン）が行った。彼女の発表は日本社会における少女マンガの役割を振り返る伊藤公雄の発表と、主に女性たちのサブカルチャーであるヤオイを論じる溝口彰子の論考とともに本書に収録されている。

第２のセッションでは、コミックスが女の子や女性に対して果たす役割から、コミックス研究自体に視点を移し、特に文化横断的研究を妨げるような言説をいかに乗り越えられるかについて論じた。パスカル・ルフェーブルと夏目房之介、そして小田切博による問題提起は、彼らの発表の自己批判的な側面もあってか、本会議においてもっとも活発な議論を呼び起こすことができた。

第３のセッションは、「マンガと社会」というタイトルの下で、今日の日本のマンガ研究ではあまり対象とならないコミックスの政治的な側面と、その論考を支える社会科学的アプローチを検討した。林増如（リム・チェンジュ）は、シンガポールとマレーシアというアジアにおける全く異なる二つのケースを紹介し、他の発表では触れられていなかったカートゥーンにまで言及することによって、今回のコミックス論の範囲を広げた。また、芸術社会学者のトーマス・ベッカーは、ブルデューによる「場」をめぐる理論を手がかりに、美学と社会学をいかに絡み合わせるかについての問題提起を行った。本書に論文が含まれるこの２人のほか、韓国文化を専門とする山中千恵による報告もあった。彼女はこの会議において、台湾における日本マンガの普及を世代論的に論じ、ライフ・ヒストリーにおけるメディア消費を、アンケート調査の成果に沿った形で考察した。

会議の最後に、世界中で翻訳版が出版され、さまざまな関心を呼んでいるため交流を行う機会が得やすい「はだしのゲン」をめぐるワークショップを企画した。これまでの類似企画と違って今回のワークショップは、このマンガが諸文化、

ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/
© 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center

つまりさまざまな言語圏やコミックス文化の文脈においていかに受容されてきたかに重点を置かず、むしろ「はだしのゲン」を具体例に、コミックス研究の可能性を検討したのである。その際、ジャンル特有の約束事を考慮に入れながらも、固定した読みを疑問視することを通して、公的記憶、特に日本を戦争の被害者とみなす言説と関連した「はだしのゲン」のポテンシャルを追究した。このワークショップでは、本会議において数少ない作品論からの発表もあった。マンガ表現論などのコミックス研究における「形式主義」に対して批判的である研究者は（本書において例えば鈴木繁の論文にこのスタンスが窺える）、個々の作品の分析に終始しないで読書行為やその諸コンテクストを研究すべきであることを求めている。しかし、本書でも確認できるように、少なくとも日本のマンガ研究においては作品論が支配的であり、十分行われているとは決して言えないだろう。例えば、夏目房之介、雑賀忠宏、溝口彰子などの論考には、具体的な作品のタイトルが登場し、その表現とモチーフ、物語内容へのアプローチはあるが、本書に限っていうと作品そのものではなく、意味づけと感情移入、あるいはジャンルといった広義の問題を論じるために例として取り上げられたと言ってもよいだろう。それとは対照的に、加治屋健司とトマス・ラマールは、作品分析の対象となるマンガ作品と、マンガに限定されない政治的な問題（例えば、歴史的暴力に対していかに対抗するかなど）についても新しい視点をいかにもたらすことができるかを示している。例えば、ラマールの作品論も「形式主義」に対して批判的ではあるが、しかし、個々の作品を丁寧に読むことを、読者やジャンルを調査することと置き換えるより、マンガ特有の政治的批判力を明らかにするために、主にマンガ・リテラシーと構造、意味づけに固執してしまってよいのかという問いを発しつつ、形式がもたらす意味を追求している。付け加えれば、ノッパがその論考で同人誌マンガのいわゆる「コンテンツ分析」を求めていることも、作品論の役割との関係から注目に値するだろう。

本書では、コンテクスト分析に関する論考が作品（テクスト）分析に比べ圧倒的に多い。同様に、歴史的問題が、ノッパとケース・リベンスによるインターネットについての言及を除いて、将来的な問題よりも優先的に取り扱われている。そのほか、マンガ産業については全く触れていないわけではないが、例えば雑賀の論文のように、経済学ではなく文化社会学の視点から捉えたものもある。また、

ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/
© 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center

社会学といっても、主にアンケート調査を拠り所とするような社会学ではない。さらに、2009年12月の会議は「芸術の街」である京都で開催されたにもかかわらず、「芸術としてのコミックス」という視点は関心を引きそうではなかったと思われたため、芸術学や映画研究などからの問題提起を視野に入れなかった。こういった面もあるが、本書の存在意義は、コミックスのすべての側面を網羅するのではなく、むしろ方法論の中心的な問題を照らし出し、また、諸文化を対比して論ずるより、横断して考察することにある。この意図を認めていただけると編者として大変嬉しい。

日本国際交流基金と東京ドイツ文化センター、また大城房美が代表となっている「女性MANGA研究」の科学研究費による支援で、ドイツのマンガ家クリスティーナ・プラカを含む9人のゲストを海外から招聘することができた。これらの招聘には予算や制度の関係から恣意的な側面もあることは言うまでもないだろう。しかし、開催者側のネットワークは、南米と東欧、またアラビアなどの研究者の参加を得られるほどにまで達していないことも認めざるを得ない。地理的あるいは地域的な意味での文化のほかに、もう一つの問題があった。会議の報告者や本書への寄稿者は、特定の「学術」観に偏っているかのように見えるかもしれない、という問題である。ここでいう「学術」とは理論的思考と方法論的自覚、さまざまな言説の理解、そしてそれによってコミックスの諸文化および既存の学問分野の両方を横断する能力を指している。ところで、このような「学術」はコミックス研究に関していうと、日本を含むアジアではそれほど一般的ではない。根本的に近代ヨーロッパで形成されたこの「学術」は、現在、北米の大学やその独特な制度に強く規定されていると言っても過言ではないだろう。北米式の学術会議は日本でも開催され、日本のポップカルチャー、なかでもマンガやそれと関連するファン文化がその対象となりつつある[3]。「国際化」の名のもとでしばしば英語のみで開かれるこれらの会議は、一般的な日本人のマンガ研究者が参加するのではなく、むしろ米国の大学院を卒業した若手日本人研究者を含む、米国の大学制度と縁のある研究者および学生・留学生を対象としている場合が多い。事実、日本国内でマンガ研究の代表と見なされている人々が報告者に含まれていないことがある[4]。日本のマンガ研究は、日本マンガ学会（2001年発足）が存在しているにもかかわらず、「文化横断」の面でも「学術」の面でもいまだに未熟だという現状を反映してのものなのだろうか。

確かに、日本におけるマンガ研究は、マンガ収集家と評論家の活動にその主な起源をもつ。そのうちの何人かが現在、大学教授になってはいる[5]。ところが、長年、「在野」で行われてきたマンガ研究は、二つの極端な傾向をみせている。一方では、伝統的なアカデミズムを過大評価することであり、もう一方で制度内の学術を過小評価することである。1970年代以降、文化的エリートがマンガをその一般の読者から奪い取り、「異質」な目的のために利用する恐れから、人文系研究や知識人の言説に対する深い懐疑が存続している。例えば、ベッカーはこれに類似した姿勢をヨーロッパのコミックス作家に見出し、こういった姿勢を研究者が認識するよう求めている。また、小田切は、現在の日本で支配的である海外コミックスに対する無視をまさにこの姿勢に還元する。小田切の論考は、大人向けの社会批判的カートゥーンよりも元来子供向けだったストーリーマンガがマンガの主流と見なされるようになったことで、マンガが言説的にナショナライズされてきた事実を指摘しているが、「文化的エリート」に対する嫌忌が、似た者同士からなる自らのコミュニティではなく、一般社会を対象に活動する評論家に向けられたこと、また、この嫌忌が、1990年代以降、マンガ市場やマンガ業界に対する無批判性をともなってきたことに触れていない。

一方では、学界とは疎遠だった「在野」のマンガ研究において、批判的理論や政治的文脈ではなく、実証的歴史研究や構造主義系の記号論などに重点を置くような「学術」観が主流をなしてきた。それは、例えば、日本マンガ学会が毎年開催する大会の際にも明らかになっている。また、マンガを主な研究対象としない研究者に、本会議のような共同研究のための協力を得ることは難しい

3　例えば、2010年に第14回大会が開催された日本アジア研究学会に加え、テンプル大学日本校サマー・スクールと関係している近年の諸シンポジウムが挙げられる。

4　本書での夏目房之介と小田切博、また、国際マンガ研究センター共催第2回国際学術会議での報告者である藤本由香里と伊藤剛などである。2010年秋にケルンの日本文化会館で開かれる第2回国際学術会議のプログラムについては次の（英語のみの）サイトを参照。http://imrc.jp/conference/（最終確認 2010年9月10日）

5　森田の論文によると、この現象は日本社会においてマンガの地位が完全に確立されているということを必ずしも現しているのではなく、むしろ日本の大学制度における近年のポピュリズムと関連しているのである。

ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/
© 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』
ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/
© 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』

理由でもある。そういった状況にもかかわらず、2009 年 12 月の会議に協力していただいた方々、特に本書にも寄稿された社会学者の伊藤公雄と日本近代文学研究者の川口隆行、芸術学者の加治屋健司、さらに、会議当時、最後のワークショップの司会者であったメディア研究者の福間良明にお礼を申し上げる。付け加えれば、日本人の会議報告者および本書寄稿者の過半数が、母語の日本語に加え少なくとも一つの外国語を使うことができ、また、自らの研究領域とマンガ研究の両方において専門知識があることを記しておきたい。

つい最近まで、日本におけるマンガ研究は、日本国内のマンガのみに固執し、しかもマンガという新しい対象をもって既存の学問分野を揺るがそうとしたことはなかった。それとは対照的に、本会議では文化横断的な意味での学術研究、つまり、文化的背景も言説的視点も異なるコミックス研究者同士の批判的な相互関係を築くことを志したのである。マンガに対するスタンスは、例えば、国籍と世代、つまり、手塚治虫のストーリーマンガなどの古典的作品、あるいは近年の同人誌や OEL マンガ[6] を主な対象とするかによって大きく異なる。しかし、コミックスの場合、国籍と世代に限定されず多様性がある。例えば、本会議には学者や研究者、評論家と翻訳者、学芸員とさまざまな分野の大学院生が参加した。これは、学術会議としてきわめて例外的ではあるが、言語的な面でも学問的な面でもかなりの工夫が求められる。理論に裏づけられた論考と歴史的記述、どちらかといえば評論に近いもの、そして個人的な経験報告もあるなど、寄稿の形式がさまざまである本書からも読み取れるだろう。バイリンガルである本書を翻訳・編集する過程において、これらの寄稿から、同時に日本人と日本人でない読者を対象とする難しさを痛感した[7]。近年、日本語以外で書かれたマンガ論も多く出版されているが、そのうち、特定の知識を単に紹介することに限った内容であればわざわざ和訳する必要はないと思われるが、本書に集められた論考などは、英語版の読者にも日本語版の読者にも刺激を与えるポテンシャルがあると自負している。

2009 年 12 月の会議とは異なり、本書の論考は 3 部に再構成した。第 1 部は、

6　Original English Manga、はじめから英語で描かれたマンガ。小田切博、黄少儀、そして林増如によって触れられてはいるが、本書においては十分とはいえず、今後の課題である。
7　この序文が英語から和訳されたことからも明らかであろう。

ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/　© 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』

知名度の高いコミックス研究者であるグルンステンと夏目、さらに小田切とルフェーブルの寄稿からなり、コミックス研究自体に焦点を当てている。彼らと同様に森田も主に異文化間（インターカルチャー）の関係を考慮に入れているのに対し、鈴木は、日本の SF ジャンルにおけるメディア横断的な動向や、海外でよく「ジャンル」と見なされる日本マンガの越境的普及に文化横断（トランスカルチャー）的な傾向を見出している。ここでの「ジャンル」論は個々の作品に対して読者が求めるものを追求することを促すが、コミックスのすべてがジャンルものであるかという問題をも提起しているかもしれない。

第 2 部は、雑賀とベッカー、そしてノッパによる「作者性」をめぐる言説の検討から始まるが、読書とジェンダーをめぐる諸問題へと重点を移す。制作と受容という二つの側面は、ノッパと溝口が示すように、ファンの世界において重なり合うのである。また、猪俣紀子は、少女向けコミックスがフランスでも存在していたにもかかわらず、その存在自体が忘れられてしまった原因を探り、それを雑誌という独特な出版形態のあり方に見出している。ここでは間接的に日本の少女マンガの成長が国民文化ではなくメディア史に還元されることが述べられている。現在、フランスの女性読者は、必ずしもコミックスにおいて女性限定の領域を求めていないことを指摘することによって、少女コミックスの発達史および現状の再検討を促す論考である。少女コミックスが、1960 年代以降、香港の近代化にいかに関わり、また、現在どのような役割を果たしているかが、黄少儀によって紹介されている。その際、具体例として選ばれるのは、最も人気の高い女性キャラクターであり、かつ、現在、日本から輸入されている多数の少女マンガではなく、唯一の少女向け香港漫画として読み続けられている作品である。黄少儀と同様に、「歴史と記憶」をテーマとする第 3 部の最初の論者である林増如は、日本マンガの輸入やマンガ・スタイルのグローバルな普及を、社会やコミックスのローカルな歴史との関係から問題視している。この歴史に取り組むためには、マンガよりも自国のオルタナティヴ・コミックスがふさわしいということを示唆している林に対し、リベンスはアンネ・フランクについてのコミックスを分析した結果、コミックス自体が「歴史のないメディア」なのではないかという疑問を提起した。会議におけるリベンスの報告は、戦争コミックスに対する姿勢の変化を追求しただけでなく、史実がポピュ

ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/　© 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』

ラーなアイコンへと移り変わり、メディア横断的な動きを見せるという近年の動向に言及することによって、「はだしのゲン」を再検討するワークショップへの序説のような役割を果たした。

本書の最後の三つの論考は、正面から「はだしのゲン」を取り上げ、ジャンル性の高いこの少年マンガの独特な批判力を、その情動的効果を端緒として照らし出している。川口は、原爆文学というジャンルとの比較から、表現において決して複雑とは言えない「はだしのゲン」が、実は思想的単純化に抵抗していることを示す。加治屋は、「はだしのゲン」の情動や身体、さらに社会に対する効果、換言すれば、その行動を引き起こすようないわゆるパーフォーマティヴな力を中心に据え、作品分析の際、狭義の表象内容だけでなくこの力にこそ注目するような論考を行っている。読み取りやすい個々の意味という観点よりも、マンガ、特に少年マンガというさまざまな「力」が交錯するメディアという観点から「はだしのゲン」を理解するという加治屋のスタンスはラマールの論文で理論的に展開される。マンガ論は、歴史学などの権威の優位を認め、歴史描写に関する「はだしのゲン」の短所を弁解してきたのに対し、ラマールは、「マンガを信頼する」ことを薦めている。これはコミックス研究におけるパラダイム・シフトに他ならない。学術性を保証するかのような既存の方法論を無批判的にコミックスに適応するのではなく、コミックスという新しい対象をもってアカデミズムを揺るがしながら、既存の学問分野が捉えることのできないような新たな文化の研究へのシフトだと思われる。コミックス研究に独特なポテンシャルがあるとすれば、それは短所とされてきたコミックスの側面こそその長所と見なす努力にある。「コミックスを信頼する」この視点は、文化横断的な問題にも当てはめる必要がある。その際、ローカルなものとして認識されるコミックスだけでなく、越境的で雑種的なマンガにもローカルな文化とつながる可能性を見出すことができるだろう。

国際マンガ研究センターを代表して、2009 年 12 月の会議に参加した方々および本書に協力した方々にお礼を申し上げる。私費でわざわざ京都までお越しいただき、暖房が十分ではなかったマンガミュージアムのホールで 3 日間に亘ってきわめて活発な討論に参加されたことに加え、本書のために当時の報告を根気よく書き直してくださった方々に特に感謝する。多大な支援をくださった団体と個人および上記のすべての協力者、さらに京都国際マンガミュージアムの皆様に感謝の意を表したい。さらに、通訳と翻訳、そして本書の編集に協力してくださった方々、特に工藤陽子と杉本＝バウエンス・ジェシカ、キャシー・セル、顔暁暉、ザック・ウッド、野田謙介、杉本章吾、パトリック・W・ガルバレス、三宅俊夫、吉原ゆかり、中垣恒太郎、竹内美帆、レナト・リベラ、須川亜紀子、椎名ゆかりに深謝する。

予測した以上の時間と労力がかかった本書ではあるが、それによって会議で始まった議論がこの先続くならば、その時間と労力が決して無駄ではなかったと思いたい。

2010 年 9 月 15 日　京都にて

注記：

＊日本マンガ学会編の機関誌の執筆要領に従い、本書におけるマンガの作品名は「〜」、所収先の書籍、あるいは連載されている雑誌名は『〜』と表記する。

＊写真はすべて京都精華大学国際マンガ研究センター提供。

ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/
© 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』

ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/
© 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』